



Title	＜書評ノート＞Evans, Vyvyan (2004) The Structure of Time : Language, Meaning, and Temporal Cognition. Amsterdam and Philadelphia : John Benjamins
Author(s)	早瀬, 尚子
Citation	大阪大学英米研究. 2008, 32, p. 55-65
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99322
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

書評ノート：

Evans, Vyvyan (2004)

The Structure of Time: Language, Meaning, and Temporal Cognition.
Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins*

早 瀬 尚 子

1. はじめに

Evans (2004) は、1980年代に認知言語学の分野で研究が盛んであった語の多義性に対して、新しい基準を提案するアプローチを唱えている。この事例研究として英語の *time* という名詞の多義を扱い、それぞれの多義が認定される基準を提示している。

本論に入る前に、まずこれまでの語彙意味論研究の背景を概観しておきたい。語の意味を記述するのには大別して3つの立場がある。まず1つは Homonymy アプローチといって、一つの語には一つの意味しか対応していない、とする立場である。例えば、「銀行」の意の *bank* と「土手」の意の *bank* とは互いに関連しない別物、つまり同音異義語である¹。これと同じように、時間を表す *time* とリズムを測るのに用いられる *time* とは同音異義語、つまり互いに関連していない全く別の単語 *time* 1, *time* 2 として処理することになる。しかし、*bank* はともかくも *time* の場合には何か関連づけが感じられるというネイティブの直観を、この立場では捉えることができない。更に、この立場に立てば、語の数はその意味の数だけ際限なく増えていくことになる。このような欠点から、homonymy アプローチは避けられる。

二つ目のアプローチは monosemy (単義) アプローチといって、一つの語には抽象的な意味が一つだけ結びついており、実際の場面や文に現れる個々の具体的な意味は、この抽象的な意味から推論によって得られるとされてい

る。しかし、どんな語の場合にも一つの抽象的な意義が抽出できるものかどうかという点にまず疑問が挙がる。また、一つの語の広範囲にわたる意味を、すべてこの単義が一つだけで包括する必要があるため、この立場が認定する単義の抽象度はかなり高いものにならざるを得ない。その結果、その心理的実在性が疑わしいものとなる。またそのような抽象度の高い単義に基づいて、本当に常にその場その場で推論により具体的な意味が導かれているのかも疑問の声が挙がるようになる。心理学実験などの結果を見ると、ネイティブはもっと具体的な意味を複数、互いに関連しあった形で心的辞書に保持していることが示されており、今では単義アプローチの妥当性を疑わしいとする説が濃厚である。

そこで登場したのが、現在の認知言語学での基本となっている polysemy (多義) アプローチ (Lakoff 1987, 他) である。これは homonymy と monosemy の中庸を取る立場であり、一つの言語形式には具体的な意味のレベルで複数の異なった意義が、互いに関連する形で結びついている、という立場である。ただし、このアプローチも方法論上の欠点が指摘されるようになってきた。異なる意義としてどのレベルまでを認めるか、という問題である。つまり、意義 1, 意義 2, 意義 3 として別々に立てられたものが、実は同じ意義 A が文脈上異なった現れ方をした異種であるのか、それとも本当に別の意義として認定されうるものなのか、その基準が曖昧であったために、研究者の数だけ意義記述がバラバラの状態で提示されることになってしまった。これを polysemy fallacy (多義性の誤謬) と Evans は呼び、この反省に立脚して、統一的な手順を打ち立てる必要性を主張し、自らそのたたき台を提出する。これが Evans 言うところの principled polysemy (決まった手順に基づいた多義性) である。

2. Evans (2004) 概要

Evans では Time をとりあげ、その意味を 8 つに分類する。その際に用いられた手順は以下の 3 つの基準に照らすことである。

<A>Meaning Criterion (意味の基準：以下 MC と略す)

Concept Elaboration Criterion (概念精緻化の基準：以下 CEC と略す)

<C>Grammatical Criterion (文法的基準：以下 GC と略す)

<A>の MC は、当該の意味が、他の意味に対するプラスアルファを含んでいるか、つまり、明らかに異なる意味だと認定できるかどうか、を判断するものである。の CEC はその概念（ここでは time）と共起する形容詞や動詞といったものが、他の意味のものとは明らかに異なっているかどうかを判断するものである。<C>の GC は、その概念（ここでは time という名詞）そのものがどういう文法的な現れ方をするか、具体的には可算名詞としてふるまうか、あるいは質量名詞として、あるいは固有名詞的か、といったことを認定する。

Evans は、まず<A>の MC が満たされていることが必要条件であり、それ以外に少なくとも一つの条件が満たされていれば、異なる意義として認定しても良いという判断を下すとする。そしてこの条件に照らして、以下の 8 つの異なる意義を認定する。

(1) a. DURATION Sense : interval (幅のある時間) を表す

The relationship lasted a short time. (その関係は短かった)

歴史的に最も早く、他の意義を最も包括的かつ効率的に導ける意義

CEC) 長短を表す形容詞や、移動動詞と共起

GC) 基本的に質量名詞として機能

b. MOMENT Sense : 点としての時間

The time for a decision has come. (決断の時が来た)

CEC) 直示的移動動詞と共起

GC) 可算名詞として機能

c. INSTANCE Sense : 回数としての時間

This time, it was a bit more serious. (今回はことはもう少し深刻だった)

CEC) 特定の動詞と共起はしないが、長短を表す形容詞や移動動詞とは共起しない

書評ノート：

- GC)：複数形が多く、可算名詞として機能
- d. EVENT Sense：特定の出来事（文脈・文化で決まる）の始終時を表す
His time (of death) is approaching. (彼の臨終の時が近づいていた)
CEC) 直示的な移動動詞と共起
GC) 可算名詞と固有名詞両方の特性を表す
- e. MATRIX：様々な事態が生じる背景として普遍的に存在する意味
Time flows forever. (時は永遠に流れゆく)
CEC) 移動動詞（水の流れ、は虫類の移動、等）
GC) 質量名詞と固有名詞両方の特性を表す
- f. AGENTIVE：変化をもたらす主体としての解釈
Time has devoured my youth. (時（の神）が私の若さをむしばんだ)
CEC) (比較的急な) 変化を表す動詞
GC) 固有名詞として機能
- g. MEASUREMENT-SYSTEM：物差し・尺度としての意味
They performed the dance to waltz-time. (ワルツのテンポに合わせて踊った)
Summer Time (夏時間)
We get paid double time on public holidays. (休日労働の倍額賃金を支払われた)
CEC) 特定はできず
GC) 可算・質量・固有名詞の振る舞いをする
- h. COMMODITY：貴重なものとしての時間
She's invested a lot of time in that job. (その仕事に多くの時間をつぎ込んだ)
CEC) 貴重なもの（金銭など）を扱う動詞と共起。
長さではなく量化表現と共起 (How {*long / much} time have you spent on the job?)
GC) 質量名詞として振る舞う。量化される

(1a-d) は比較的普遍性の高い、時間固有の意味 (primary temporal concepts) であるのに対し、(1e-g) は文化に依存した意味 (secondary temporal concepts) である。

異なる意義が生じる際のメカニズムとして、今まではメタファー写像を用いるのが一般的であったが、Evans はメタファー写像を極力排除したいと考えている。その理由は、メタファー写像による意味記述では、実際には存在しない表現をも写像によって予測してしまう、という、写像のギャップ (mapping gap) を生み出すからだ。たとえば AGENTIVE Sense や COMMODITY Sense はそれぞれ、たとえば TIME IS A DEVOURER, TIME IS MONEY 等の概念メタファーによる写像で生み出すという可能性もあるが、現実には生物やお金に対して使えても時間に対して使えない表現が存在する (?Time has slowly nibbled away at my youth / We cannot withdraw {??time / money})。この解決策として、メタファーという適用力が強すぎる普遍性の高い抽象法則を適用して意味記述をするのではなく、具体的な文脈における推論や含意によって少しずつ意味が変わっていくとする語用論的強化に基づく意味変化という理屈をもとに、Time という語に限った地道で詳細な意味記述を行うことを提案している。

3. 批判的分析

Evans の試みは野心的である。無秩序に増え続けてしまう多義のパターンと、その評価方法の欠如を憂い、誰がやっても同じ結果に至るための科学的な基準の必要性を訴え、自らその一例を提案している。Evans 自身、「これが決定版というわけではなく、あくまでもたたき台として提示している」と述べており、その点では先駆的な研究と評価できる。特に、今までは共起する動詞の違いで意味の違いを判断する、つまり意味だけに判断をゆだねる傾向があったが、それに加えて <C> の GC という、その名詞自体がどのような文法的ふるまいを見せるかという、統語的、文法的な要素も重視すべきと提案したことは、明確な基準を導入する上で必要な、古くて新しい視点だと思われる。

しかし、やはりいくつかの疑念もまた浮かんでくる。一つは、Evans 自身が提案している三つの基準の適用の仕方である。この中で一番大きいのは、<A>で述べた意味の基準の適用を巡る問題だと思われる。Evansによれば、まずこれを満たしていなければ、あとの二つの基準を満たしていても、それは同じ意味の異なる現れでしかない、ということになる。しかしこの<A>のMCの認定自体は後の二つに比べて主観の度合いが高く、また言語テストがあるわけでもないので、客観性の点では劣ると言わざるを得ない。

例えば、Evans は11章の Matrix Sense と12章の Agentive Sense とを区別する。一方で、Metric で用いる time、Dance のテンポという意味の time および Summer Time の time とは、それぞれ可算名詞的、質量名詞的、固有名詞的に振る舞う、つまり<C>のGCに照らせばふるまいが異なるにもかかわらず、同じ Measurement Sense の中に分類している。それはそもそも<A>のMCでEvansが、前者は異なる意味だと判断し、後者は同じ意味だと判断したことに起因する。ただ、それが文脈による違いかどうかを判断する基準やテストは用意されていない。

もし最初にこの3つを違う意味だと認定して出発しても、確かにふるまいの違いが認められるので<C>の基準をもクリアしてしまい、結果として2つ以上の基準で異なる意義だと判断するとした Evans の原則を満たすことになる。つまり、決まった手順に基づいているはずの分類だが、最初の基準である<A>の判断次第で、他の分類の可能性も排除できなくなるわけで、Evans が目指した科学性が、必ずしも実現できてはいないことになる。

これを修正するためには、一つには<A>を認定するための何らかのテストが必要であること、もう一つには、もしかすると、と<C>の基準の適用順序を決めておく必要があるかもしれない、ということが挙げられよう。これは意味変化において、意味が先なのか、文法的ふるまい、つまり形が先なのかという問題と関わってくるように思われる。意味が異なるとその使用域が変わってくるので、当然ながら共起できる動詞群に変化が起きることが予想されるし、それに従ってその名詞自体の用いられ方が変わってくる

のではないだろうか。もしこれが正しいならば、＜B＞の方が＜C＞より重要で、先に満たすべき基準だということになる。意味変化の法則とも照らし、優先順位を決めるというのも一つの解決策になるかと思われる²。

もう一つの批判点として挙げられるのは、意味変化のプロセスを示す際の、具体例の少なさである。メタファーに依らない、現実に沿った説明を目指す Evans の試みはよくわかるが、その試みの方が優れていることを明確に示すためには、実際の文脈での含意によって新しい意味がもたらされたと言うことがわかる例をだすべきである。たとえば、たとえば、Evans は意味の違いを強調するためか、DURATION Sense は移動動詞と共起し、MOMENT Sense は直示的な移動動詞と共起する、としか述べていない。しかし実際に Google 等で検索してみると、MOMENT Sense として何度も挙げられている The time for a decision という表現は、DURATION sense と共起するとされていた動詞と用いられている例を見つけることができる。

(2) The time for a decision is {very limited / needed / about 6-8 weeks}.

このような、形式的には MOMENT sense とされる表現が、DURATION sense 等他の意義と共起すると規定した動詞群と重なって用いられる、というのは、まさに橋渡しの例ではないだろうか。このような、どちらとも分類できる事例は、まさに概念メタファーの立場では説明が難しい例なので、もっとこのような例を積極的に出すべきだったと思う。語用論的強化による意味変化を説くならば、二つの意味の橋渡しとなる事例をもっと出して欲しかった。一つの意味から別の意味が生まれてくることに対して、具体的な英語の表現例を伴わない、一般的かつ抽象度の高い説明に終始しているのがあまりにも多く、それが残念である。

4. 日本語の「時」および「時間」との比較

Evans の time の分析は、あくまでも英語の time という語の多義の分析であるため、同じことが他言語の対応する語に言えるわけではない。しかし、日本語の「時」および「時間」という表現に適用してみると、いくつか興味

深い対照研究が行えるように思われる。以下ではその一端をいくつか挙げてみたい。

まず、英語の time では Moment Sense と Instance Sense とが分けられている。Moment Sense の time は、時間軸上の一時点を表す意味だが、Instance Sense は特定の事例を表す意味である。Evans によれば、Moment Sense から Instance Sense へと語用論的強化により徐々に派生したという説明がなされている。このように英語では二つとも time という同じ形式で表せるのだが、日本語の場合にはそれぞれに異なった語を用いる。つまり Moment Sense としては「時」「時間」を用いることができるが、Instance Sense としては別の語、具体的には「度」「回」などを用いるため、日本語では棲み分けが行われていることになる。しかしながら、日本語においても「時」を Instance Sense で用いる例がないわけではない。例えば以下のような例である。

- (3) a. 一時は(＝一度は)あなたに心を許したこともあった
- b. 次の時(＝今度)に持ってきます
- c. 一時(＝一度)に三万も使った

このように、日本語のように英語とは全く異なる言語においても見られる傾向・意味変化であることから、Evans の提案する語義リンクとなる推論は、特異な例ではないとする傍証となりうる。

次に、英語では Matrix Sense と Agentive Sense とが別の意義として認定されていた。その根拠として、Matrix Sense では川の流れ等で用いられる恒常的な動作が共起しやすいのに対し、Agentive Sense では変化動詞が共起しやすいという分布の違いが挙げられていた。特に後者は、状態変化をもたらすには何か原因があるはずだとし、その原因を Agent として見立てることに起因するとされていた。この意味で用いられる time には、変化を示す動詞、それも比較的急激な変化が好まれ、ゆっくりの変化はあまり共起しにくい (the Agentive Sense seems unlikely to be elaborated in terms of acts or processes which do not result in a change of state or indeed which produce only a gradual change of state. (p.162))、と議論されていた。その理由として、ゆっくりの

変化は「特定の Agent によるものと見なしにくいから (gradual change is less likely to be evident, and may not even correlate with a specific agent. (p.162)」とされている。しかし、日本語の場合、(5) のように、ゆっくりの変化でも何ら問題なく生じる。むしろ英語とは異なり、早い変化、特定の Agent をイメージさせる行為の方が共起しにくい。

(4) a. ?Time has slowly nibbled away at my youth.

b. ?Time has corroded my youth.

c. ?Time has eroded my youth. (Evans 2004: 162)

(5) a. 時が {ゆっくり / 徐々に / ?急に / ?突然 / ?あっという間に} 若さをむしばむ / うばう

b. 時が傷を {いやしてくれる / ?治してくれる}

これらのことから、日本語では、Matrix Sense と Agentive Sense の区別がそれほど明確ではないのではないかと思われる。そもそも日本語では、「状態変化をもたらすものには何か原因があるはずと考えて、その原因を Agent に見立てる」ということをあまりしない。英語では無生物を主語に見立てて表現する傾向の強い「する」言語であるのに対し、日本語は状態変化をそのままに表現する傾向の強い「なる」言語であるとよく指摘されるが (池上 1980 など)、この「する」傾向が強い言語では Matrix と Agentive を区別して考える一方、「なる」傾向が強い言語では、二つの区別を立てる必然性がそもそも存在しないということにもなりうる。この議論が正しければ、言語としての傾向が、語義のありようにも影響してくるという可能性もある。

5. ま と め

メタファー分析に基づく意味記述に慣れている読者にとっては、Evans のように禁欲的に地道な記述を行うやり方は違和感を覚えるかもしれない。また分析の方法に関して、具体的な例証が少ないことから、説得力が減じられている欠点も否めない。しかし、厳格な方法論を提案し、実践しようとする試み自体は、長い多義研究の中でようやく出てきた観点であり、その方向性

は間違っていないと思われる。ここで提案された多義のあり方が正しいかどうかは、心理学的実験等経験的な検証を待つ必要があり、それ次第で方法論に対して修正を加える余地は十分にある。しかし、語彙意味論の問題点、分析方法等に関して様々な議論を生み出す最初のたたき台として、本書は必読の書であると思われる。

注

- * この書評ノートは、2007年度の英語学研究Ⅲにおいて取り上げた同書の購読に基づいている。この授業の中で出てきた bank の例に関して、受講生の一人から「bank の二つの意味は歴史的に関連していると読んだことがある」とのコメントがあり、不勉強な筆者がメールで気楽に質問したのが田尻先生であった。田尻先生は、ご自分で OED その他を調べ、その結果をわざわざ筆者にお電話でご教示下さった。その内容は本論の脚注 1 に反映されている。実は、奇しくもそれが、田尻先生のお声を聞いた最後となってしまった。感謝申し上げますと共に、謹んでご冥福をお祈りいたします。
- (1) 実はこの bank も単純な同音異義語（全く別物であり、同じ形なのは偶然）ではなく、歴史的、語源的には関連づけが可能であることがわかる。英語史の観点からは通常、同音異義語説をとるが、それは bank₁（土手）が古ノルド語からの借入語であるのに対し、bank₂（銀行）は初期近代英語期（15-16c）にイタリア語から借入された語であることに基づいている。しかし、語源的に見ると二つはいずれも同じゲルマン祖語の bankon（隆起したものという意味を表す）から来ており、一方はそのまま bank₁（土手：隆起している）となり、もう一方は bench（「台（隆起したもの）」→「金貸しの用いた台」→（メトニミー的に）「金貸し」）を経て、bank₂（銀行）へと変化したことがわかる。実際中英語期に Chaucer が「金貸し」の意味で bench を用いている事例もある。つまり、二つは語源的には同じ語であったものが、それぞれ別のルートをたどり、後に別物の意味を携えて戻ってきた、ということになる。（田尻雅士氏のご教示による）
- (2) 確かに、用法によっては動詞とは共起しにくいものもあるだろうから、その場合には は排除して <C> を優先することになるだろう。

参考文献

- Grady, Joseph (1999) "A Typology of Motivation for Conceptual Metaphor: Correlation vs. Resemblance." In R. Gibbs and G. Steen (eds.) *Metaphor in Cognitive Linguistics*. John Benjamins, 79-100.
- 池上嘉彦 (1980) 『「する」と「なる」の言語学』大修館書店
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about Our Mind*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff George and Mark Turner (1989) *More than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metaphor*. Chicago: University of Chicago Press.
- Tyler, Andrea and Vyvyan Evans (2003) *The Semantics of English Preposition: Spatial Scenes, Embodied Meaning and Cognition*. Cambridge: Cambridge University Press.